

謡曲「藤」と藤波神社

藤波神社を中心とした田子地方は、奈良時代は湖で、岸辺には藤が群生していました。越中の国主だった大伴家持は船遊びを楽しみ、和歌を詠み、万葉集に残されています。神社境内には今も数本の藤の老木が茂り、当時の面影を伝えています。

謡曲はその万葉の和歌を題材としました。都から善光寺に向かう僧が立ち寄り、藤を眺めて恨みがましい古歌をつぶやく。すると女が現れ「藤には楽しい歌がたくさんあるのに、なぜそんな歌を吟じなさる」とたしなめる。女は成仏できないで苦しんでいた「藤の精」だった。僧が経を唱え、まどろんでいると藤の精が現れ、読経により成仏できたことを感謝して舞を舞います。

謡曲史跡保存会



















大伴家持卿歌碑

この歌碑は明治三十六年に建立せられたもので、八十数年を経過して風化がひどく、文字がほとんどよめません。それで日記によつてをにわかりやすく書いてみました。

正面

大伴家持卿歌碑

正四位勲三等 巖谷 修謹題

右面

藤奈美能影成海之底清美
之都久石乎毛珠等曾吾見流

裏面

此天平中越中守大伴宿祢家持卿所詠
明治三十六年八月
東宮侍講從四位本居豊顯書

和歌は万葉集の原文に従つて漢字(いわゆる万葉仮名)で書いてありますが、現代風に書くと次のようになります。

藤波の影なす海の底清み
しずく石をも珠とぞわが見る

奈良時代にはこの神社の前の水田池等はみな湖水で、「布勢水海」と呼ばれており、周回の丘陵には藤が繁茂し、初夏の頃には紫の藤の花が咲き落ちて、それはそれは美しい光景でありました。家持卿は毎年、初夏の頃に布勢水海に舟遊びをし、藤の花をたたくたかたかくさん採りました。これもその一つです。(万葉集巻十九、四一九九巻)「藤の花が影をたたくたかたかく採りました。これもその一つです。(万葉集巻十九、四一九九巻)「藤の花が影をたたくたかたかく採りました。これもその一つです。(万葉集巻十九、四一九九巻)「藤の花が影をたたくたかたかく採りました。これもその一つです。(万葉集巻十九、四一九九巻)」

そのころの湖の水は澄みきつていて「入日光がさしこんで、水底の石が宝石のように見える」といふようでした。

正面の文字を書いた巖谷修(いわやおさむ)は政府の高官であり、かつ關西の大名家で、一六八〇年(明治三十八年七月、七十二歳)で没しました。蘭語作家と右面と裏面の文字を書いた本居豊顯(もとけとよあき)は修の三男です。

豊長の曾孫で、国学・国文学に長じ、東宮(後の大正天皇)の先生となり、また東京帝国大学講師となりました。大正二年二月八十歳で没しました。

この神社はもと神明社と称したが、家持卿の藤花を詠じた古歌にちなみ、明治十八年八月、田子浦藤波神社と改称しました。今も、藤が天に昇るような藤の大木が何本も繁つており、(昭和六十二年七月記)

大伴家持卿歌碑

この歌碑は明治三十六年に建立せられたもので、八十数年を経過して風化がひどく、文字がよくよめません。それで旧記によつて左にわかりやすく書いてみました。

正面

大伴家持卿歌碑

正四位勲三等 巖谷 修謹題

右面

藤奈美能影成海之底清美
之都久石乎毛珠等曾吾見流

裏面

此天平中越中守大伴宿祢家持卿所詠

明治三十六年八月

東宮侍講從四位本居豊顕書

和歌は万葉集の原文に従つて漢字(いわゆる万葉仮名)で書いてありますが、現代風に書くこと次によりになります。

藤波の影なす海の底清み

しづく石をも珠とぞわが見る

奈良時代には、この神社の前の水田増帯はみな湖水で、「布勢水海」と呼ばれており、西側の丘陵には藤が繁茂し、初夏の頃には紫の藤の花が咲き遍ちて、それはそれは美しい光景でありました。家持卿は毎年、初夏の頃に布勢水海に舟遊びをし、藤の九十九番(藤の花が影をうつしている水海の水が清らからで、底までよく見える。底に沈んでいる石をも玉のように私には見える)そのいろの湖の水は澄みきつていて、私には見える。底にみづく石も珠とぞわが見る。

王國の文字を書いた巖谷修(いわやおさむ)は政府の高官であり、かつ書道の大家で、一六八七年に没した。明治三十八年七月、七十二歳で没しました。巖谷修の右面と裏面の文字を書いた本居豊顕(もとおりとよか)は、有名な国学者本居宣長の曾孫で、国学・国文学に長じ、東京(後の大正天皇)の先生となり、また東京帝國大学講師となりました。大正二年一月八十歳で没しました。また東

この神社はもと神明社と称したが、家持卿の藤花を詠じた古歌にちなみ、明治十八年八月、田子海原神社と改称しました。今も、藤が天に昇るような藤の大木が祠本も繁つております。(昭和六十二年七月一日)











越中時代の大神の家持（水見を中心として）

西暦	年号	年齢	大伴家持をめぐること	平城京	歴史的事項
七一〇	和銅三				
七一八	養老二	一	家持、大伴鞍人の長男として生まれる。		
七四六	天平一八	二九	越中国守司として、越中国府（高岡市伏木）に着任。家持の館の宴で、大伴兼主と出会う。 九月、弟の善持がなくなる。 重い病にかかす。		
七四七	天平一九	三〇	三月、二上山の賦（越中三賦の一）を作る。		
七四八	天平二〇	三二	四月、布勢水海に遊覧する賦（越中三賦の一）を作る。 九月、放逐せる鷹の歌を作る。 三月二十五日、田辺福徳を遊せて布勢の水海で遊覧し詠歌を、出挙のために、越中国内へ越中・能登を巡視。		東大寺大仏のための金が、陸奥の国から産出
七四九	天平二二	三三	妻の坂上大嬢が、越中へ来る。		
七五〇	天平二二	三三	四月六日、お勢の水海に遊覧し詠歌。 四月二二日、再度、水海遊覧し詠歌。 越中から都へ帰る。		
七五一	天平二二	三三			
七五二	天平二二	三三			大仏開眼供養
七五八	天平二二	三九	家持、因幡の国守となる。		
七五九	天平二三	四〇	家持、最後の歌を詠む。		
七八五	延暦四	六八	家持、宮城隈多賀城でなくなる。		

布勢の水海の想定図
およそ千二百五十年前の奈良時代、十三谷一帯に「お勢の水海」という

巡行ルートについて
出挙の政のための巡行ルート。国府から松

英達の浦に寄する白波いや増しに
立ちしき寄せく東風をいたみかも
(巻一八 四〇九二)

昭和五八年

この雪の消える時にいざゆかな
山たちばなの実の光るも見む
(巻一九 四二二六)

昭和六一年

新しき年の始の初春の
今日降る雪のいや重げ吉事
(巻二〇 四二二六)

平成元年

藤波の影なす海の底清み
しづく石をも珠とぞわが見る
(巻一九 四一九九)

平成二年

田子の藤

大伴家持は「布勢の海水」に遊覧し、舟を泊めて、多胡の浦で藤の花を望み見て作った歌の一つに、
『藤波の影なす海の底清み沈く石をも珠とぞわが見る』(巻十九 四一九九)とあります。

「布勢の海水」周辺の景観のなかでも、とくに多胡の浦の藤は心をひきつけずにはおかなかったと思われる。
元禄二(一六八九)年、俳聖芭蕉が「奥の細道」の旅で万葉故地としてかねて心をよせていた田子を訪れようとし、果たせませんでした。その折に詠んだ句が、
『早稲の香や 分け入る右は有磯海』

と言われています。

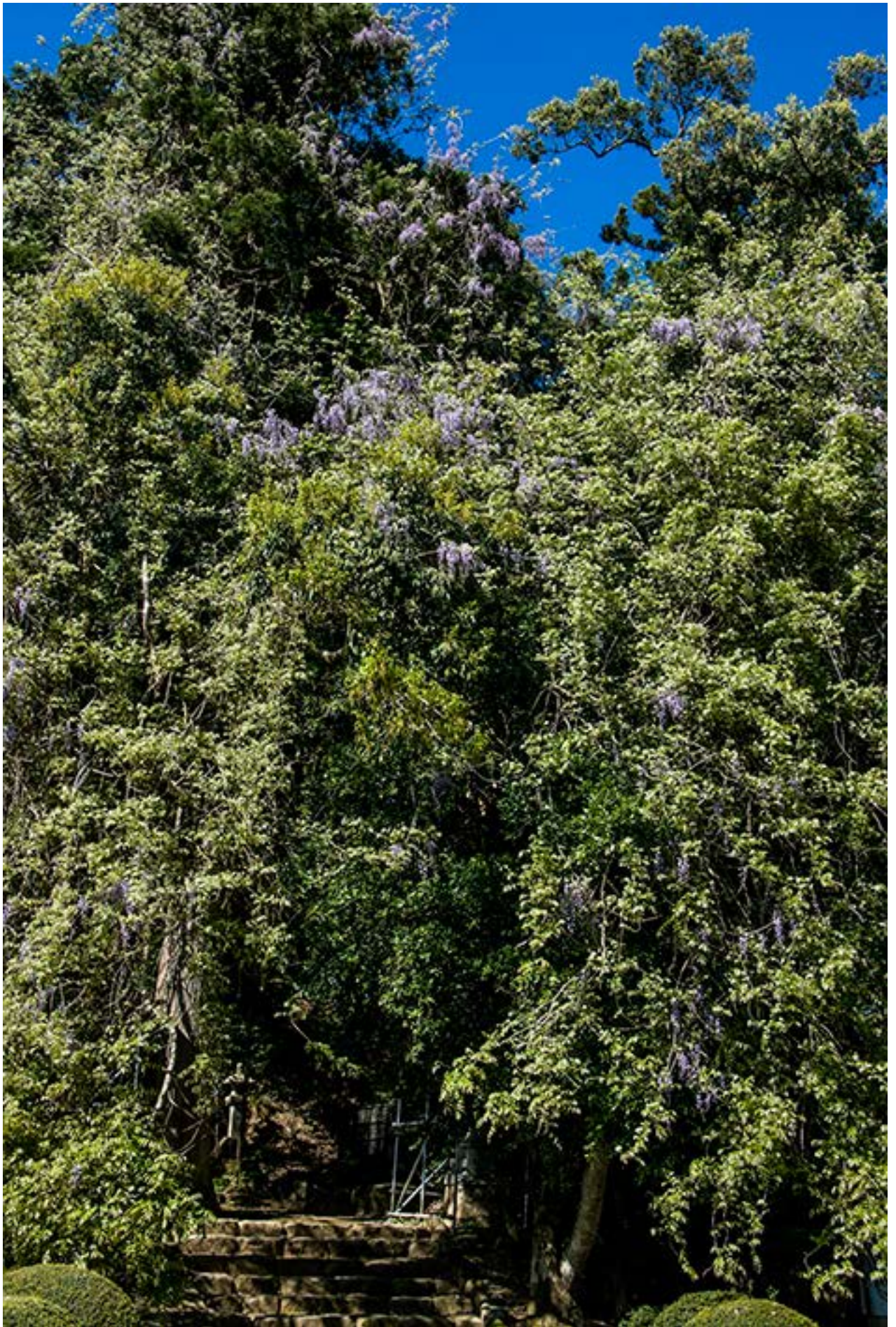
また、このほかに、幻想的な謡曲『藤』の主題ともなっており、古くから文人をはじめ、多くの人に愛されてきました。

田子の藤は、かつて「田子の白藤」として知られていたことが、『越中志微』などの文献から伺うことができますが、現在は、白藤をほとんど見ることはできません。参道中央の藤はヤマフジで、幹周りが一・六メートル、高さ二・九メートルあり、五月初めには紫の花が目を楽しませてくれます。



















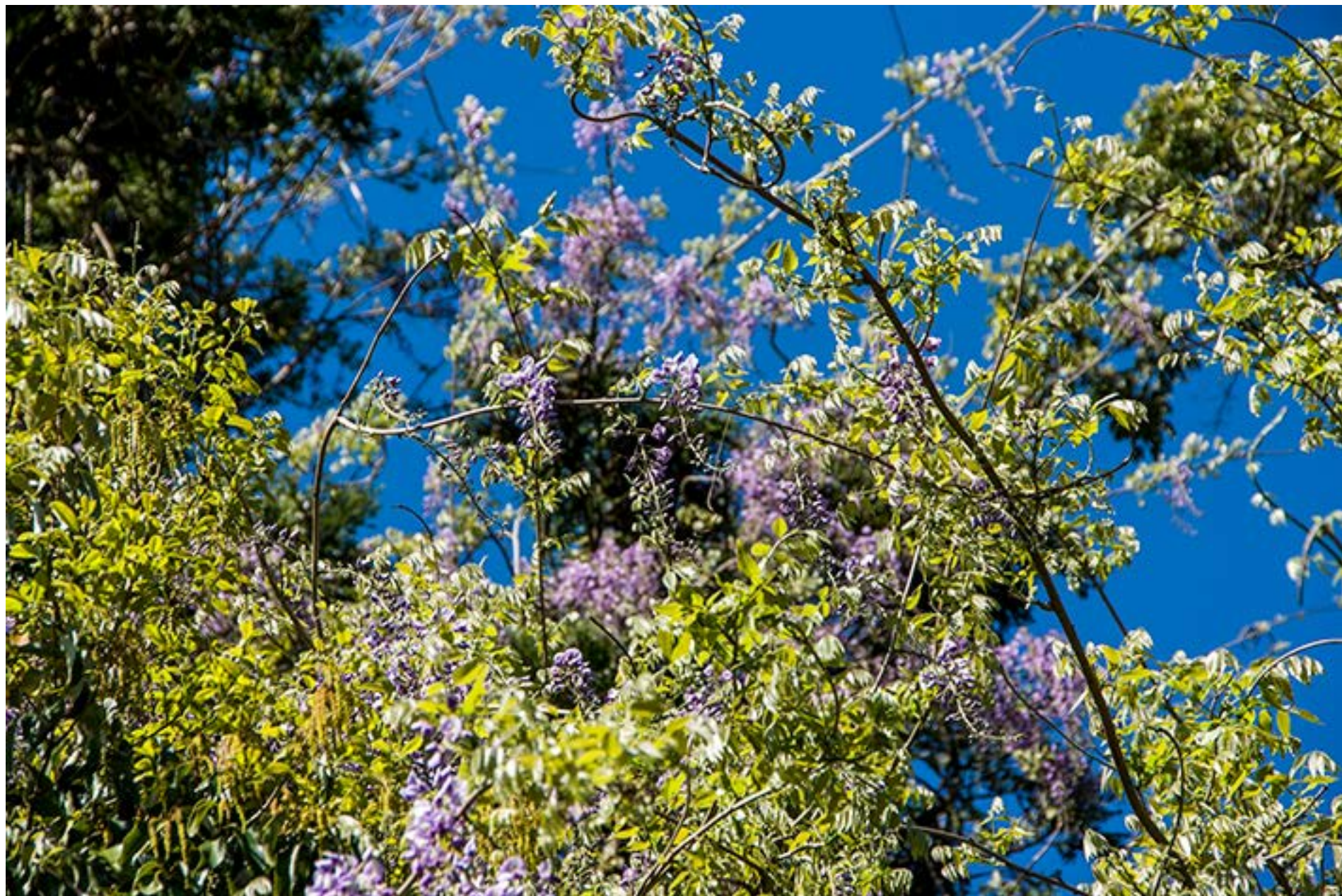




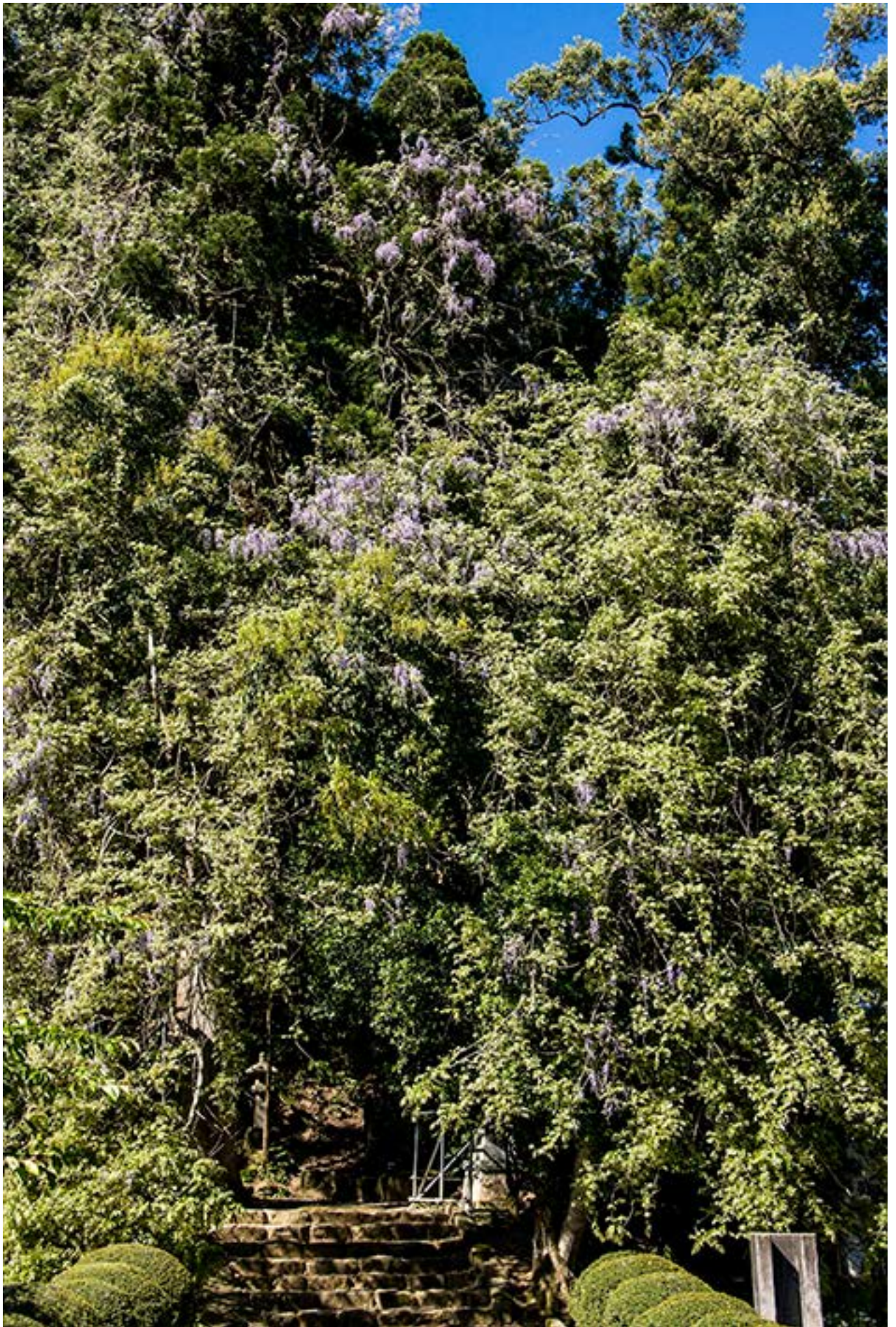
















礮部神社社叢

氷見市指定天然記念物
昭和四七年四月一五日

礮部神社は、延喜式神名帳（延喜式神名帳）に記載された式内社（式内社）に比定される古社で、祭神は礮辺氏の祖神天日方奇日方命（天日方奇日方命）を祀る。

礮部神社社叢は、標高約一〇〇メートルに位置し、常緑樹の多い森で、高木層としては、西から北側の斜面には常緑広葉樹のウラジロガシが優占し、中央部の社殿に向かう参道をいくと大きなスギが立ち並ぶ。また社殿より上部にはユズリハとモミの大木がある。

社叢の高木層以外の主な構成種は、低木層はヒメアオキ、ヤブツバキ、ヤツデ、シロダモ、草本層はベニシダ、ヤブコウジ、トキワイカリソウである。

社叢の西向きの正面部分には大きなフジが高木にからみつき、花期には紫色の長い花序を垂れたフジの花が、社叢前面を覆うように広がる。

氷見市教育委員会







